

# 平成21年度 島根大学教育学部附属学校園 幼小中一貫教育 基調提案

## I 一貫教育をめざすにあたって

### 1. 一貫教育への願い

現在、全国の教育界の動きをみると、これまでの校種を越えた連携教育や一貫教育が活発なものになっている。小中一貫教育全国サミットは、今年度で4回目をかぞえ、小中一貫教育全国連絡協議会に所属する自治体も増えている。島根県では、今年度から松江市教育委員会が協議会の正会員となり、本学校園の周辺でも連携・一貫教育の推進が進んでいる。

このような動きの背景には、「児童生徒の心身の発達面から、現在の学校教育のあり方が適合していないのではないか」、「中学校へ進学する際に、学習内容が難しくなるだけでなく、思春期の難しい時期に、学習方法や指導原理の異なる新しい環境に入る際の移行が円滑に行われていないことが、いじめや不登校、小中の理解度の大きな落差の背景のひとつになっているのではないか」等の指摘がある。連携・一貫教育は、これらの指摘の解消とともに、子どもたちの豊かな育ちを実現することをめざしたときのひとつの方法である。連携・一貫教育の推進が子どもの成長につながることは間違いないが、それぞれの学校や地域の実態が異なるため、各学校・地域ならではの取り組みの充実が必要である。

### 2. 本学校園の実態とめざす子ども像

連携・一貫教育を語る際に、忘れてはならないことは、学校園の実態の違いを考慮することである。その点で考慮すべきことには、「連携する学校の数」、「各施設間の距離」、「学校の規模」などが挙げられる。

本学校園は、幼稚園・小学校・中学校の3つによる体制を敷いており、その意味では、1対1対1という関係である。また、施設間の距離については、3つの校舎が並列に隣接しているため、施設隣接型と言える。その他には、幼稚園から小学校、小学校から中学校へ進学する際に受検があり、子どもの数が増えていくという特徴がある。現在は移行期であるが、平成25年度には、各学年の子ども数が、幼稚園は40名、小学校は60名、中学校は140名となる体制が完成する予定である。

以上のような実態のある本学校園であるが、一貫教育のスタートにあたって、一貫教育を通して「どのような子どもを育てていきたいか」を検討し、共通理解することから始めていった。子どもの育ちを見つめ、義務教育が終了する15歳の春にはこんな姿になってほしいという願いを込めて、めざす子ども像を以下の3つに設定した。

- 新しい時代を切り拓き、社会に貢献しようとする子ども
- 豊かな感性を育み、創造的に探究し続ける子ども
- 人とのかかわりを大切に、共に伸びていく子ども

平成18年度にまとめられた、このめざす子ども像の実現をめざして、本学校園の一貫教育は進められている。

### 3. 子どもの実態

本学校園には、4歳から15歳まで総数約900名の子どもたちが通っているが、わたしたちは、まず本学校園に通っている子どもたちの現状について、意識調査を行ったり、語り合ったりして実態を詳しくつかむことから始めていった。

#### (1) 意識調査から

項目については、「追求して学ぶ姿」「思いやりのある姿」「集団の一員としての姿」という3本柱から内容を検討し、以下のように14項目を設定した。記述は、子どもたちの自己評価によるが、幼稚園段階では自己評価が難しいため、教員による評価を行った。(平成20年2月実施)

意識調査項目（全14項目）

| 〔追求して学ぶ姿〕   | 〔集団の一員としての姿, 思いやりのある姿〕 |
|-------------|------------------------|
| 1 初発の考えをもつ  | 9 相手の考えを大切にする          |
| 2 自分の考えをもつ  | 10 あいさつをしている           |
| 3 筋道をたてて考える | 11 友だちの気持ちを考えて行動する     |
| 4 疑問をみつける   | 12 共に創り上げる喜びを感じる       |
| 5 最後まで追求する  | 13 他者からの愛を感じる          |
| 6 力をくらしに生かす | 14 自己肯定感をもっている         |
| 7 家でも学習している |                        |
| 8 最後まで聞く    |                        |

結果については、以下の通りである。

| 項目 | 1    | 2    | 3    | 4    | 5    | 6    | 7    | 8    | 9    | 10   | 11   | 12   | 13   | 14   |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 結果 | 2.94 | 3.02 | 2.83 | 3.23 | 3.01 | 2.76 | 2.56 | 3.14 | 3.30 | 3.44 | 3.13 | 3.37 | 3.06 | 2.70 |

結果を分析してみると、すべての項目において、平均値（2.5ポイント）を超えており、追求して学ぶ自分、集団のなかで思いやりをもって暮らしをつくる自分にある程度の満足感をもっているのではないかと考えられる。しかし、「力をくらしに生かす」（項目6）、「家庭学習」（項目7）や「自己肯定感」（項目14）に関わる数値が低いことは課題である。

## (2) 教員同士の語り合いから

実際に日々子どもたちと接している各学校園の教員が、お互いの学校園のようすを知ったり、子どもの実態をつかんだりするために語り合う場を数回設定した。その結果を集積すると、おおよそ子どもの実態として下記のようにまとめることができた。

〔よい姿〕

- ・全体的に明るく素直で、笑顔に満ちた暮らしをおくっている。
- ・真面目な姿勢で活動し、学ぶことができる。
- ・自分たちの力でつくる活動に対する意欲が高い。

〔改善していきたい姿〕

- ・よりよい人間関係を構築していく力が弱い。
- ・社会規範の遵守、思いやりの心が十分に育っていない。
- ・自分を大切にすることができ、自分を肯定的にみることができている子が少ない。
- ・知識と行動をつなげる力が十分に育っていない。

## (3) 意識調査, 語り合いから

本学校園の子どもの実態を分析してみると、よさと課題がいくつかあげられるが、その中でも、特に注目したいのは、課題のひとつである「自己肯定感」である。「自己肯定感」は、一つの事柄からつくられるものではなく、多様な要素が複雑にからみ合いながらつくり上げられていくものであるため、原因を一つに特定するのは難しい。しかし、その大きな一因は、まわりの人との関係のなかで自分をいかに高めているか、いかに生きているか、貢献できているか、そして、人に必要とされているかという思いを十分に感じることができていないからではないだろうか。その意味では、本学校園が取り組むべきことがまだまだあると考えられる。4歳から15歳までの発達段階には、まわりの中で自分がどう位置づいているかを見つめることができるようになる時期がある。そのような発達段階も考慮しながら、自分が存在する価値を見つめ、自分の行動を有意義に感じることができるよう取り組みを設定していくことは大切なことではないかと考える。

そこで、子どもたちの姿のなかで、よい点をどう伸ばし、改善していきたい点をどのようにして改善していけばよいのか、それを推進するための取り組みについて考察しながら歩み出すことにした。

## Ⅱ 今年度の取り組み

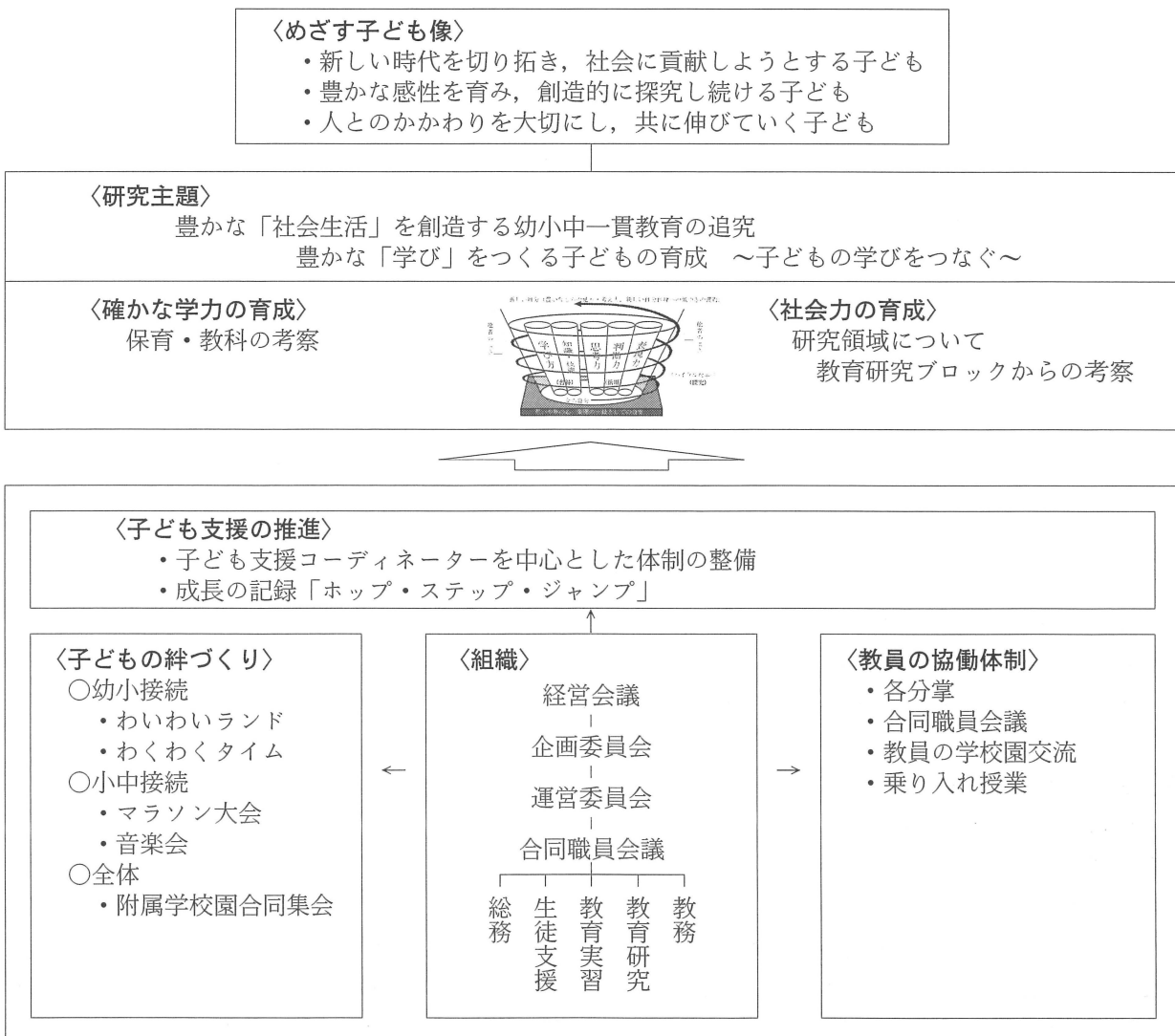
### 1. 取り組みの概要

一貫教育に取り組む場合、様々な手法が考えられるが、本学校園では施設隣接型の環境にあることを考慮して、「教員の協働体制」、「子どもの絆づくり」、そして、生徒支援的側面から「子ども支援の推進」に取り組んでいる。

「教員の協働体制」には、取り組みの実働をする各分掌の活動、幼小中の全教員が参加する合同職員会議の開催、各学校園の教員がお互いの学校園文化や子どもの実態を理解するための学校園交流、中学校教員による小学校授業の実施を実現した乗り入れ授業などの取り組みがある。そして、「子どもの絆づくり」には、子どもどうしの交流を軸にした幼小接続期の取り組み、中学校行事への参加を軸にした小中接続期の取り組み、幼小中の11年間全体を見渡した取り組みがある。「子ども支援の推進」としては、子ども支援コーディネーターを中心とした支援体制の構築、子ども自身が自分の成長を見直すことを目的とした「成長の記録ホップ・ステップ・ジャンプ」の取り組みがあげられる。

そして、それらの取り組みをベースにしなが、今年度は、研究的アプローチから、確かな学力の育成と社会力の育成をめざしている。確かな学力の育成については、保育・教科学習を中心に引き上げ、日常で行われている保育・授業の充実を通して思考力・判断力・表現力の育成をめざすことで達成しようと考えている。そして、社会力の育成については、「保育・生活・総合」「道徳」「特別活動」という研究領域を中心にして、人と人がつながってよりよい社会をつくり出していくための力の育成をめざしている。

その取り組みを図にまとめると、以下のようになる。



## 2. 組織

上記のような取り組みを進めるためには、幼小中が一つのチームとしてまとめ、一貫教育体制を実働させていくための組織をつくる必要がある。組織としては、年々細部の変更を行っているものの、今年度は、以下のような組織をつくって一貫教育体制の運営を行っている。

### ①附属学校部経営会議

附属学校園の取り組みを決める最高決定機関である。附属学校部長、校園長、副校長、副園長、附属学校主事で構成されている。月1回程度開催される。

### ②附属学校園企画委員会

附属学校園の取り組みについて大枠を協議する機関である。校園長、副校長、副園長、教頭、附属学校主事が所属している。月1回程度開催される。

### ③附属学校園運営委員会

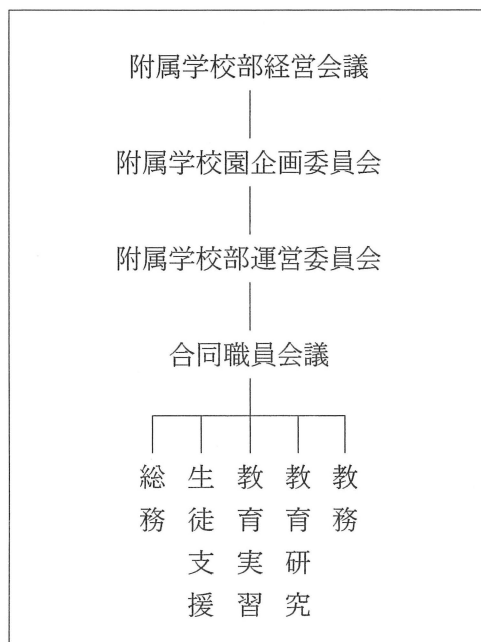
附属学校園の具体的な取り組みについての相談機関である。校園長、副校長、副園長、附属学校主事、子ども支援コーディネーター、幼稚園委員および各分掌の部長が所属している。月1回程度開催される。

### ④合同職員会議

附属学校園の取り組みについて、全教員が共通理解するための場である。毎月2回、第2・4水曜日に開催することを原則としている。全体会で連絡、協議することにより、共通理解を図るとともに、様々な部会を行うようにしている。

### ⑤各分掌

それぞれに部長を1名配置している。部長は、それぞれの分野に関して、附属学校園全体の取り組みを計画し、運営している。



本学校園では、以上に紹介したような組織で一貫教育の運営を行っている。これまでいくつかの改編を行っているが、特に良かったと思われるのは運営委員会を設置したことである。企画委員会が、取り組みの大枠や方向性を協議し、合同職員会議で伝え、各部が活動するだけでは、トップダウンのみによる運営になってしまう。しかし、各部の部長や幼稚園委員、子ども支援コーディネーターが参加できる運営委員会を設置したことにより、各部で協議した内容が議題としてあがってきたり、取り組みのための意見として伝わってきたりして、ボトムアップが進む結果となっている。これが、幼小中が一体感をもって進んでいくための一助となっているのは確かなことである。

## 3. 取り組みの具体

### (1) 教員の協働体制の確立

#### ①各分掌の取り組み

##### ○教務部

現在、学習指導要領の改訂を受けて、新しい教育課程の準備を進めていくことが求められている。まずは、幼稚園、小学校、中学校のそれぞれが完全実施にむけて準備をしなければならない。幼稚園では、保護者とともに行う放課後プログラムの整備、小学校では外国語活動の整理、中学校では選択



教科のあり方を含めた総合的な学習の時間の整理を中心に協議をしている段階だが、それが整ったら11年間を見通したカリキュラムの考察をしていく予定である。また、評価に関するつながりも考察しており、通信票のあり方が一番の議題となっている。

1日の日程について、「小学校と中学校の1・3・5時間目の開始時刻を揃える」ことを行ってからは、乗り入れ授業や交流学习、研究授業の実施がスムーズになり、様々な取り組みを円滑に進めるための土台をつくることができた。

#### ○生徒支援部

子どもの暮らしについて、具体的な施策を企画し、運営している。家庭とともに規範意識の向上をめざすなどの取り組みを企画し、推進していく。これらの活動は、小学校の児童会活動、中学校の生徒会活動との連携を図りながら、推進されている。活動としては、「成長の記録 ホップ・ステップ・ジャンプ」、「附属学校園合同集会」の実施が挙げられる。

#### ○教育実習部

現在、島根大学教育学部に通う学生の教育実習を円滑に行うために、大学の教育実習部と協力しながら、幼小中における教育実習のスケジュール調整、指導目標や体制に関する情報交換や共通理解、教育実習生に対する指導の統一等を図るために連携した活動を行っている。

#### ○教育研究部

幼小中が同じ研究テーマのもとで、教育研究を推進している。子どもを長い目で育てることのよさを感じつつ、課題も共有しながら、指導の充実を図っている。今年度は、特に、保育・授業づくりを中心に子どもの学びを充実させていくことをめざしているが、社会力の育成に関わる内容にも目をむけた活動を行っている。

#### ○総務部

教育情報の管理や共有、子どもの安全管理などの連携を模索しているが、現在検討していることは「緊急時下校体制の整備」である。地震等の緊急時に、幼小中において兄弟姉妹がいる場合、一カ所に集まることができれば、安全に且つ迅速に家庭との連携をとることができ、混乱も小さくなるだろうとの考えのもと、整備を急いでいる状況である。

### ②合同職員会議

#### ○目的

一貫教育体制の取り組みについて共通理解したり、様々な取り組みを協議したりする。

#### ○方法

毎月2回開催することを原則としている。全体会で共通理解すべきことが伝えられ、各部会を開催することによって細かな取り組みについて協議している。

#### ○成果と課題

##### 〈成果〉

- ・各学校園では、それぞれが特質のある取り組みを行っている。忙しい日常のなかで、各学校園の教員が協議するために集まることさえも難しいのが現状であるが、合同職員会議を設定することで、全体会や部会において細部の協議が行われ、全教員での動きを生み出している。

##### 〈課題〉

- ・その都度必要な部会が協議の上で決定されているため、先の見通しをもつことが難しい。

### ③教員の学校園交流

#### ○目的

教員が各学校園の暮らしにふれ、子どもの実態等を知るとともに、お互いの学校園文化への理解をより一層深める。

#### ○方法

附属学校園教員（管理職，事務職を除く）全員を対象にして，以下のような方法で行っている。

- ・自分が勤務する学校園と異なる校種に1日出かける。（学級朝礼～学級終礼）
- ・いつ，どこに出かけるかについて各自の希望をとり，調整を行う。
- ・1日に学校園から出かける教員が1名となるように調整する。
- ・暮らしの観察が主な活動になるが，子どもといっしょに過ごすことを大切にする。
- ・幼稚園4歳児学級への希望は，6月以降からとする。

#### ○成果と課題

##### 〈成果〉

- ・教員が，言葉だけで11年間をイメージするのではなく，子どもや学校園を実際に見て感じたことから11年間をイメージできるようになった。その意味で，教員の視野を広げることができた。
- ・他の学校園に出かけたことによって，自分が勤務する学校の課題がより明確に見えてきた。

##### 〈課題〉

- ・活動のための事前打ち合わせの時間，そして，終わった後に協議をする時間をどのようにして生み出していくのか等，時間の問題が大きい。
- ・一人の教員が出かけた後の校内体制をどのようにして維持していくのか，さらに工夫していく必要がある。

### ④乗り入れ授業

#### ○目的

教科の専門知識がより深い中学校の教員が小学校の授業を担当することにより，子どもたちの教科への興味・関心をより喚起し，子どもたちの学びをより充実させていく。

#### ○方法

|        |  |   |
|--------|--|---|
| 方法     | 小学6年生の授業を中学校教員が行う。<br>※小学校，中学校の人事配置を考慮して，可能な教科で行う。 |   |
| 今年度の体制 | 常時   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽・中学校教員1名が小学6年生の授業を行う。</li> <li>・家庭科・中学校教員1名が小学6年生の授業を行う。また，小学校在籍の家庭科を専門とする教員が中学校選択教科（家庭科）の指導を行う。</li> </ul>                   |
|        | 時期活動   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国語活動・小学6年生の外国語活動のなかで，年間2単元について，中学校英語教員が小学校教員と一緒に指導する。</li> <li>・体育・小学6年生の中学校マラソン大会への参加にそなえて，体育の授業において小学校教員と一緒に指導する。</li> </ul> |

#### ○成果と課題

##### 〈成果〉

- ・中学校教員の指導を小学6年生が受けることにより，中学校における学習指導上大切にしている事柄についてふれることができ，徐々に指導が位置づくようになっていく。学習意欲の喚起だけではなく，時間と提出物についての厳しさも学ぶことができている。

##### 〈課題〉

- ・教育実習や人事上の問題も絡むため，すべての教科で乗り入れ授業を実施することができない。そのため，この施策についての検証も難しくなる。

## (2) 子どもの絆づくり

### ① 幼小接続

#### ○目的

幼稚園、小学校低学年の子どもたちが、異学年交流することにより、様々な場面における人とのふれあいを豊かに経験し、コミュニケーション能力の育成を図る。

#### ○方法

|        | 交流活動 わいわいランド   | 交流活動 わくわくタイム  |
|--------|--|---|
| 対象     | 5歳児と小学1年生が、遊びを通して交流する。   | 4歳児、5歳児、小学1年生、小学2年生が、遊びを通して自由に交流する場である。希望者による活動である。   |
| 活動     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・月1～2回程度</li> <li>・金曜日 11:00～11:45</li> <li>・場所は、幼稚園園庭、小学校中庭、小学校南庭</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・月2回程度</li> <li>・○曜日の20分休憩の時間 (10:40～11:00)</li> <li>・場所は、幼稚園園庭</li> </ul> |
| 活動のながれ | 「こんにちはタイム→あそびタイム→またねタイム」というながれで、「出会い→自由遊び→活動のふりかえり」という枠組みを大切にしている。   |   |

#### ○成果と課題

##### 〈成果〉

- ・知っている人とだけ遊んだり、遊ぶことが見つからなかったりする姿もあるが、新たな「ひと」と出会う機会になっている。その充実のためには、見守っている教員が的確なはたらきかけをしなければならぬが、環境設定、個へのはたらきかけの仕方を明確にしていくことの大切さにも気づくことができた。
- ・最初は、自分がしたかった遊びができずに不満そうな子どもがいるが、回数を重ねるうちに、その姿が減っていくことから、自制心を養う場にもなっていると考えられる。

##### 〈課題〉

- ・幼稚園、小学校の事情を考慮しながらの活動になるため、計画的に実施することが難しい。それが、年間指導計画への作成にもつながってくる。また、子ども自身に活動の見通しをもたせることができない現状にもつながっている。

### ② 小中接続

#### ○目的

小学6年生が中学校の行事に参加することにより、小学校行事との違いに気づいたり、中学生の取り組み様子に触れたりすることにより、これから自分が歩むであろう中学校生活について知り、先を見据えた願いや目標をもてるようにする。

#### ○方法

|        |  |
|--------|--|
| マラソン大会 | 小学6年生が中学校のマラソン大会に参加する。中学生は男子が5.5km、女子は4.5kmを走る。小学6年男子は2km、女子は1.5kmを走る。このマラソン大会をめざして、体育の授業で長距離走の授業を行い、練習する。 |
| 音楽会    | 小学6年生が中学校の音楽会に参加する。中学校は、学年別に、学級対抗で合唱を披露し、最優秀賞をめざして競い合う。小学6年生は、中学生の歌声を聴くとともに、学年全員で歌を披露する。                   |

#### ○成果と課題

##### 〈成果〉

- ・小学6年生は、中学生の颯爽と走る姿、真剣なまなざしで学級が一体になって合唱する姿にふれ、自分もそのようになりたいという願いをもつことができている。また、マラソン大会と音楽会だ

けが中学校生活のすべてではないが、自分が歩む道において、先輩たちが真剣にすごしている姿にふれ、小学校生活においても、自分を磨いていこうとする気持ちを高めていくことができている。

- ・中学生にとっては、小学生によくはない姿は見せられないという気持ちを抱かせ、活動をより真剣なものとして取り組むエネルギーになっている。

〈課題〉

- ・マラソン大会、音楽会当日の調整も難しいが、それまでの練習をどう保障するかが難しい。よりよい取り組みとなるためにも、時間の調整だけでなく、小学校と中学校の教員が一体になって小学6年生の内面をとらえながら指導していく体制の充実が望まれる。

### ③全体 ～附属学校園合同集会～

○目的

附属学校園に通う子どもたち全員が集まり、一人ひとりが本学校園の一員であることを自覚し、仲間意識を醸成する。

○方法

- ・中学3年生が園児や小学1年生と隣どうしになって並ぶなど、異なる学年の子どもたちと交流できるようにする。
- ・1時間程度の時間で行い、その企画・運営は中学校生徒会役員と小学校児童会役員の相談によって決定される。  
(今年度の例) ・各学校園の暮らしの様子紹介(生徒会役員によるプレゼン)  
・おりがみで鶴をおる(異学年交流活動として)

○成果と課題

〈成果〉

- ・10歳近く離れた園児と交流する中学生の優しいまなざしがみられるなど、日ごろの暮らしとは異なるふれあいが行われている。地域の教育力が失った暮らしの場面がつけられている。

〈課題〉

- ・附属学校園に所属する全員が集まる唯一の場になっている。各学校園の取り組みの上に位置づいたため、年間のなかで1度しか行われていない。企画と運営が生徒会、児童会に任せられるため、準備にも時間を要するが、目的から考えると、学期に1回くらいの回数が保障されるとよい。

### (3) 子ども支援の推進

#### ①子ども支援体制の構築

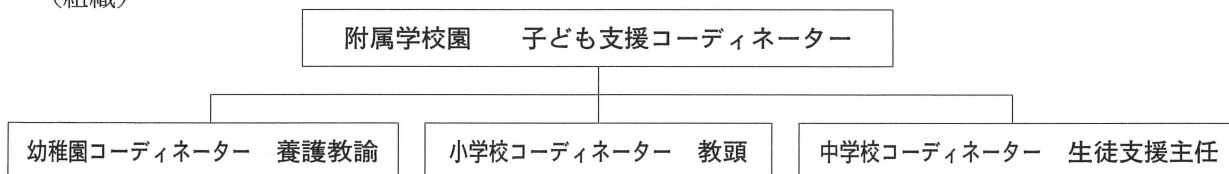
○目的

附属学校園に通うすべての子どもに対して教育的ニーズに応じた支援を充実する。そのための動きを整理し、機能的なものにする。

○方法

各学校園のコーディネーターを統括する子ども支援コーディネーターを1名置く。各学校園のコーディネーターとのパイプを築き、子ども支援委員会、ケース会議の推進、子どもの状況の把握(問題行動、不登校、学習不振、不適応など)、関係機関(医療、福祉、行政など)との連携等、子どもの支援に関する推進協力と助言を行う。

(組織)



## ○成果と課題

### 〈成果〉

- ・各学校園において、生徒支援にかかわる情報のやりとりが円滑になったことによって、気づきが広がり、対応が早くなった。
- ・特別支援教育に対するラベリング意識がよくなった。

### 〈課題〉

- ・子ども、保護者、教員について、積極的な特別支援教育をさらに浸透させる。
- ・各学校園のコーディネーターと附属学校園コーディネーターの会議を充実させる。
- ・今後、長年にわたって一貫した子ども支援体制を維持、発展させていくための仕組みをつくる。

## ②成長の記録「ホップ・ステップ・ジャンプ」

### ○目的

本学校園が取り組む生活目標に基づいて、子どもが自分自身の成長について定期的にふりかえる機会をもつことによって、自己見つけをする力を養うとともに、自分の成長を肯定的にとらえられるようにし、自尊感情を育てる。

### ○方法

- ・年間で予定されている生活目標のうち、5つの生活目標について取り組む。5つとは、「あいさつ」「通学マナー」「そうじ」「言葉遣い」「聴き方」。それぞれのテーマについて、約1週間の活動期間を設ける。
- ・毎回、テーマに基づき、カードを用意する。カードには、自分の活動のめあてを記入し、毎日ふりかえりを行う。家庭では、取り組みについて保護者と話し合う機会を設けていただく。約1週間の活動について、担任が評価言を記入する。
- ・「ホップ・ステップ・ジャンプ」ファイルをつくり、活動後のふりかえりを集積する。このファイルは、11年間持ち上がっていく。学年があがるごとに、数年にわたって自分が取り組んできたことを見つめ直し、自分の成長をふりかえるようにする。

### ○成果と課題

#### 〈成果〉

- ・自分と他者の関係がみえるようになり、安心感をもつなど、ともに暮らすという意識の醸成につながっている。
- ・テーマについて課題となる姿があったとき、各学校園の指導方法について協議し合い、共通の意識をもった指導が徹底されるようになった。
- ・取り組みを通して、保護者とのかかわりの大切さがより痛感できるようになった。参観日の学級懇談などでも話題とすることができるといふ面では、学校教育と家庭教育のパイプとなっている。

#### 〈課題〉

- ・自尊感情を育てることにつながったかについては、もう少し積み重ねがないとわからない。その意味では、その分析方法も大きな課題である。

## (4) 一貫教育推進の歩みをふりかえって

以上に述べてきたような歩みを進める中で、わたしたちは一貫教育を推進していく上で、大切にしなければならないことに気づくことができた。それは、幼稚園、小学校、中学校では、そもそも子どもの発達段階に大きなちがいがあり、これまでのそれぞれのやり方や文化を押しつけ合っている、共通理解も進まないし、一貫教育体制も整えられないということである。お互いの学校園の特色や立場を思いやり、それぞれの教育理念を共通理解するとともに、子どもの育ちについて語り合おうとする土壌を培っていく必要がある。これは、言葉では簡単に言い表せるが、なかなか容易なことではない。

また、目的と取り組み、そのための組織を整理し、点検し、フィードバックしながら推進していくこ

とが大切である。舵取り役になる企画者がP D C Aサイクルを意識し、うまくコーディネートしていくことが重要である。そして、目的をもって、できるだけ長期的な見通しをもち、トップダウンとボトムアップをうまく融合させることである。お互いに共通理解する気持ちがあれば、形は少しずつできあがっていく。わたしたち附属学校園は、そのような気持ちで歩いていくことの大切さを痛感しながら歩みを進めているところである。

以上、一貫教育を進める上で、運営面を中心に述べてきたが、次に、研究の側面からの記述をしていくことにする。

### Ⅲ 研究の取り組み

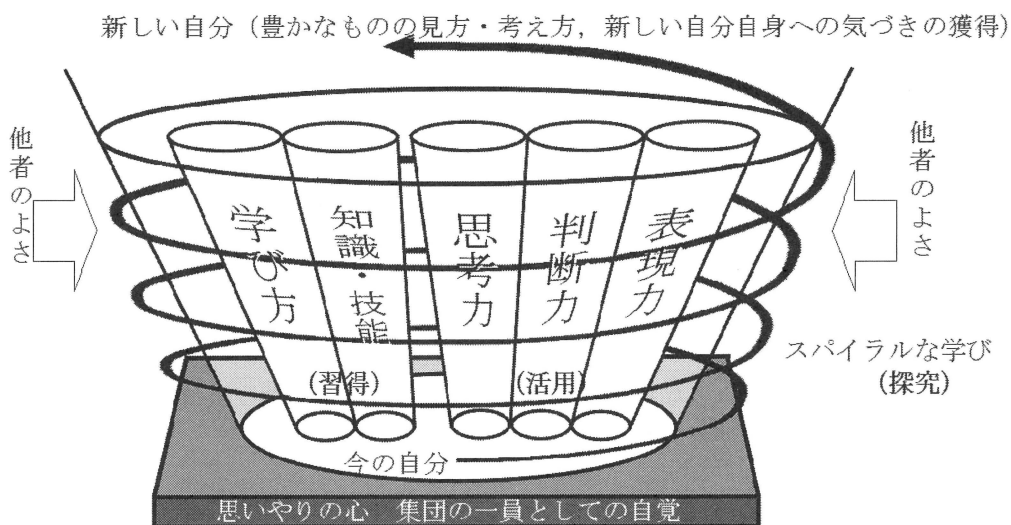
#### 1. 昨年度の研究

##### (1) 研究主題

豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究  
 豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをとらえる～

豊かな「社会生活」を創造する子どもの実現に向けた研究を継続、発展させていくために、昨年度は、「豊かな『学び』をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをとらえる～」をサブテーマとし、研究を進めていくこととした。このテーマは、豊かな「社会生活」を創造する姿を実現するために、子どもの学びをとらえることを大切にしながら、豊かな「学び」をつくるという角度からせまっていこうと考えて設定したものである。

豊かな「学び」をつくる子どもについては、思いやりをもって、集団の一員であることを自覚し、知識・技能、学び方を習得し、思考力・判断力・表現力を活用しながら、課題解決をめざして、ものの見方や考え方、自分自身への気づきをより獲得することを求めて、学び続けていく姿であると整理した。その姿をイメージ図に表すと、下記のようになると考えている。



イメージ図 豊かな「学び」をつくる子ども

研究の視点としては、子どもの学びをとらえた保育・授業を展開していくことによって、豊かな「学び」をつくる子どもを育成していけると考え、以下の2点を研究の視点とすることにした。

- 教科において、一貫して育てていく力を明確なものにし、その力の育成をめざした子どものとらえのあり方を工夫する。
- 子どもの学びに対する自覚をどうとらえ、どう生かしていくかを検討する。

## (2) 昨年度の研究から見えてきたこと

まず、教科ごとに一貫して育てたい力について整理できたことは意味が大きい。それによって、子どもを育てていく方向性が統一され、わたしたち教員が同じ土俵の上で子どもの姿について語り合うことにつながった。そして、育てたい力がどれだけ育っているかをとらえた上で、保育・授業の構想について語り合い、授業実践したことは意味が大きかった。何よりも、保育・授業を構想しようとするとき、子どもの今をとらえることから始めることの大切さを再認識できたことは大きい。

また、各教科で設定した一貫して育てたい力の育成をめざして、子どもの学びをとらえた実践を行うことによって、教科部が独自に得たものもあった。

- ・国語部・・・「読むこと」に絞って力の育成をとらえたことを契機にして、文章力の育成をめざし、力の積み上げの部分と繰り返しの部分を明確にすることの大切さを見つけ ていった。
- ・社会科部・・・社会認識の育ちを子どもの記述によるウェビングからとらえるという方法を見つけ、ウェビングを分析することで発達段階に応じた社会認識育成のあり方を見つけ出した。
- ・算数・数学部・・・具体物を用いた教材を用意し、子どもたちの主体的な学習活動を実践したなかで、自分の考えを表現していく話し合いのあり方がポイントになることを見い出した。
- ・理科部・・・科学的表現力の育成をめざした実践を繰り返すなかで、ホワイトボードの活用や、子どもの記録の活用方法にいくつかのポイントを見い出した。
- ・英語部・・・教科である中学校英語と活動である小学校英語活動の違いを考察するとともに、共通に育てていきたい力について協議を繰り返し、一貫して育てたい力を整理することができた。
- ・音楽部・・・歌唱に絞った取り組みのなかで、大人数で一緒に歌う活動だけでなく、人前に出て一人や少人数で歌う機会を増やすことで、教師とともに、子ども自身も学びの成果をとらえることのよさに気づくことができた。
- ・図工・美術部・・・3つの学年で同じ題材で異なる表現をする授業に取り組み、表現力、鑑賞力から子どもをとらえ、力のつながりを見つけていった。
- ・技術・家庭科部・・・子どもが自分の学びをふりかえるための診断カルテを使ったことが基礎・基本的な技能の習得につながり、とらえと力の育成をつなげることができた。
- ・体育部・・・技能と仲間への意識という2つの軸から子どもの学びの自覚をとらえ、それを表にまとめ、毎時間の意識の変化をとらえ続けるという、提案性のあるとらえ方を見つけた。

これらは、各教科の特性を生かしながら、子どもの学びをとらえることによって、一貫して育てたい力を育成することにつながっており、大きな成果が得られたと言えるだろう。また、子どもの学びをとらえることは、保育・授業を単元レベルで構想する前にも行う必要があるし、日々の保育・授業のなかでも行う必要があることに気づくことができた。これについては、学校園によるちがいがあってもなく、どの校園においても大切にすべきものであることが確認できた。

しかし、子どもをとらえることについては、課題も残る。何を、どのようにしてとらえれば有効なのか、そして、どのようにとらえを生かしていくのかといった点については、まだまだ協議を重ねていく必要がある。また、学習指導要領の改訂も含め、一貫して育てたい力の見直しを図り、その力を育成する上でのとらえを意識していく必要もある。

また、学びへの自覚をどうとらえるかについては、子どもの授業後のふりかえりや感想を見ることで、自分の取り組みへの満足感をキャッチするようにし、それを子どもに返すという意味で価値づけていくことが有効であることがわかってきた。これについては、授業の時間だけでできるのではなく、授業後の教員の営みを工夫することの大切さも見えてきている。



## 2. 今年度の研究

### (1) 研究主題

豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究  
豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをつなぐ～

昨年度は、先述の研究主題のもと、豊かな「学び」をつくる子どもについてイメージ図に表すことができた。そのイメージ図をもとにして、今年度も、豊かな「学び」をつくる子どもの姿を実現することをめざしていきたい。

サブテーマについては、昨年度、「子どもの学びをとらえる」とし、保育・授業を構想する上で、また、保育・授業を進めていく上で、とらえを生かしていくことのよさを各教科部でまとめることができた。また、豊かな「学び」をつくる子ども像に設定されている、知識・技能や学び方の習得、思考力・判断力・表現力といった力の育成についても、そこに向かって取り組む上で押さえておくべき内容やポイント、配慮事項等を見出すなどして、徐々に歩みが進んでいる。

そこで、今年度は、サブテーマを「子どもの学びをつなぐ」とし、子ども一人ひとりにおける11年間の力の育成を意識した取り組みを充実していく。その際、子どもがまわりの人たちとどのようにかかわり合うことによって力を育成しているのかを共通の手がかりとし、確かな学力の育成をめざした保育・教科学習を中心にした取り組みと、社会力の育成をめざした研究領域を中心にした取り組みを行ってきたいと考えている。

保育・教科学習を中心にした取り組みでは、豊かな「学び」をつくる子どもの姿のなかでも、今年度は特に、思考力・判断力・表現力の育成に主眼をおいていきたい。子どもは、他者と考えを検討し合うなかで、他者の考えを解釈し、自分の考えと融合させて熟考し、よりよい考えを求めて判断し、思考を深めていく。そして、それを説明したり、論述したりするなど、表現していくことによって他者による影響を与え、自らの考えの確かさを感得していく。したがって、このような学習をどの教科においても実践することによって、子どもは思考力・判断力・表現力を育成することができ、それが確かな学力の育成へとつながっていくと考えられる。その際、昨年度取り組んだ「子どもの学びをとらえる」ことを継続して保育・授業づくりに生かしながら、思考力・判断力・表現力の育成をめざすことは当然のことである。

また、研究領域を中心にした取り組みでは、社会力の育成をめざしている。社会力とは、筑波大学名誉教授の門脇厚司氏が提唱しているもので、人と人がつながって社会をつくっていく力であると定義されている。社会力には、社会の運営に積極的に関わっていく力、より良い社会をつくっていく意志・意欲、そのような社会を考える構想力、実際にその考えを実現・実行する資質能力などが含まれるが、それらの力は豊かな「学び」をつくる子どもを育成する上で必要な力であり、その力を育成させていくことが「思いやりをもち、集団の一員であることを自覚した」姿を育成することにつながっていく。そこで、今年度は、「保育・生活・総合」、「道徳」、「特別活動」という3つの研究領域において今まで取り組んできたことを見つめ直し、本学校園が設定している教育研究ブロックごとに整理することによって、11年間を見通した、関連性と継続性をもった取り組みとなるようにしていく。

今年度は、これら2つの取り組みから、子どもの学びをつなぎ、豊かな「学び」をつくる子どもの実現を図っていくこととする。

### (2) 具体的な取り組み

#### ① 確かな学力の育成 ～保育・教科学習を中心にした取り組み～

本学校園では、確かな学力の育成をめざし、その中核に思考力・判断力・表現力の育成を掲げながら、保育・教科学習を中心にした取り組みを進めている。具体的には、次の2つを研究の視点として取り組んでいこうと考えている。

(i) 一貫して育てていきたい思考力・判断力・表現力を明確にし、発達段階（本学校園が独自に設定している教育研究ブロック等）に応じて整理する。

思考力・判断力・表現力という3つの力については、早稲田大学教授の安彦忠彦氏が、「平成元年以来めざすべきものとして重視されてきたものであり、今までにも一つひとつが独立のものとして示されたことはない」ことを指摘している。本学校園でも、これら3つの力は、それぞれが独立して伸張するものではなく、お互いに影響し合い、補完し合って伸張するものだと考えている。保育・教科学習においては、様々な学習活動が行われるが、一つの学習活動で一つの力を育成することをめざすわけではなく、3つの力は相互に影響し合って共に伸長していくものである。

今年度は、その3つの力の育成に取り組む際に、11年間における発達段階からの整理をし、保育や授業の構想に位置づけていく。具体的な取り組みについては、各教科の特性があるため、それぞれの部の検討に委ねるが、発達段階からの整理を生かした保育・授業の実践を積み上げ、継続性のある、よりよい11年間をつくりあげることによって、思考力・判断力・表現力の育成を実現していきたいと考えている。

(ii) 思考力・判断力・表現力を育てる上で有効な友だちとのかかわり合いのあり方を考察する。

友だちとのかかわり合いについては、1対1、ペア、グループ、学級全体など、様々な形態が考えられるが、発達段階に応じて、その形態を使い分けていくことが有効だろう。例えば、だれにでも意見を求めて吸収したくなるような発達段階もあれば、自分の目的にあったかかわりをもつことを願って少人数とのかかわりを求めようとするような発達段階もある。したがって、子どもの発達段階に応じたかかわり合いがあり、わたしたち教員は、それを意図して学習活動を構想することが求められる。

また、充実した友だちとのかかわり合いをつくるために、活動そのものを工夫することも考えられる。例えば、説明や発表をして伝え合い、練り合うような言語を通しての協同的活動を取り入れることも考えられるし、劇化や実験観察、試作などの体験的活動を取り入れていくことも考えられる。

以上のように、わたしたちは、友だちとのかかわり合いを、どのような人数で、また、どのような方法でつくり出していくかを大切に、保育・授業を構想していきたいと考えている。

以上、2点について、各教科でまとめる構想において基本的な考えを述べ、保育・授業実践を行い、実践から表出する子どもの姿を通して有効性を検証していきたいと考える。

## ②社会力の育成 ～研究領域を中心にした取り組み～

本学校園では、人間は社会的な存在であり、子どもの頃から家庭、学校、地域と暮らしの基盤を広げながら社会集団のなかで成長する存在であるととらえ、めざす子ども像に「思いやりをもって、集団の一員であることを自覚して」活動する姿を掲げている。「思いやりをもって、集団の一員であることを自覚して」活動するためには、相手が存在するなかで自分をどう発揮するかを意識したり、集団のなかで自分がどのようなポジションにいるのか、どれだけ必要な存在であり、どれだけ貢献しているかを考えたりすることが望まれる。そのような姿の育成は、「ひと・もの・こと」にどう出会い、どんな経験を積んでいるかによって、大きく変わってくるはずである。だからこそ、学校教育で行われる教育活動について、「ひと・もの・こと」へのかかわりという面から整理することは大切なことではないだろうか。その整理が、社会力の育成にとって十分な活動とは言いきれないかも知れないが、人と人がつながって生きていく力を養うためには、必要なことであると考えている。そう考えると、本学校園が「思いやりをもって、集団の一員であることを自覚して」活動する姿の育成をめざす時、様々な活動について、「ひと・もの・こと」へのかかわりを整理し、一つひとつの取り組みによりよい関連性や継続性をもたせていくことは、社会力の育成につながっていくと考えられる。

では、社会力の育成を願うとき、どのような方法でせまっていけばよいのだろうか。様々な方法があるだろうが、本学校園では、まず、幼稚園・小学校・中学校が現在取り組んでいる諸活動のうち、「保育・生活・総合」「道徳」「特別活動」という3つの研究領域の活動において、「ひと・もの・こと」に対し

てどのようにかわり、どのような集団のなかで、どのような力が育っているかを見つめ、整理していくことから始めようと考えた。

「保育・生活・総合」では、11年間を通して様々な「ひと・もの・こと」に出会い、貴重な直接体験を通して、それ自体のねらいを達成すると同時に、「思いやりの心」や「集団の一員としての自覚」を育むことができる学習活動が設定されている。また、「道徳」教育は、教育活動全体において取り組むべきものであり、相手を思いやる心や集団に寄与する心を育てる大切な教育活動であることは言うまでもない。また、「特別活動」は、自分が所属する集団において、自発的・自治的活動を繰り返して行なうなかで、相手や仲間を思いやり、集団の一員としての役割を果たしていくことを学ぶ大切な教育活動である。したがって、社会力の育成をめざすとき、3つの研究領域を相互に影響し、補完し合う取り組みとして整理することは大変意義深いことである。

そして、3つの研究領域における取り組みを11年間で整理した上で、本学校園が独自に設定している教育研究ブロックごとに、発達段階からの考察を加えていく。この考察を加えることにより、研究領域の取り組みを、発達段階という角度から見つめ直していくことができる。また、力点を置いて取り組むべき活動や新しく設定すべき活動が見つかることも考えられる。

以上の取り組みを、おおまかにまとめると、以下の表に整理される。

|        |          | 教育研究ブロック  |  |   |
|--------|----------|---|--|---|
|        |          | 初等部前期ブロック   | 初等部後期ブロック                              | 中等部ブロック   |
| 育成したい力 |          | 仲間とともに活動する喜びを味わい、素直に満足感を感じながら活動する力  | 所属する集団の一員であることを感じ、所属集団のなかで自己を生かし、行動する力 | 自分が集団や社会の一員であるという自覚のもと、みんなの暮らしをよりよくするために考え、構想をもち、実現にむけて進んで行動する力 |
| 研究領域   | 保育・生活・総合 | どんな「ひと、もの、こと」に出会い、どんな活動をすることによって、どんな力を育成できているかについて、今の取り組みを整理し、11年間を見通した学習の積み上げができていないかを検討する。  |  |   |
|        | 道徳       | 各学校園にある道徳教育の全体計画を見つめ直し、思いやりの心の育成を中心に、全体計画のあり方を検討し、11年間のつながりを意識した道徳指導のあり方を検討する。                |  |   |
|        | 特別活動     | 学級、学年、学校全体といった集団で、どんな活動をし、どんな力を育成できているかを整理し、学齢に応じて重点をおいて指導する内容を見つけたり、適切な活動を設定し直したりするなどの検討を行う。 |  |   |

今年度は、「保育・生活・総合」「道徳」「特別活動」という3つの研究領域の取り組みについて、発達段階から見つめ直し、11年間の取り組みを考察していく。そして、取り組みを編成し直したり、新しい実践を考察したりして、次年度からの取り組みにつなげていきたいと考えている。

### (3) 研究推進のための組織

#### ① 研究企画会議

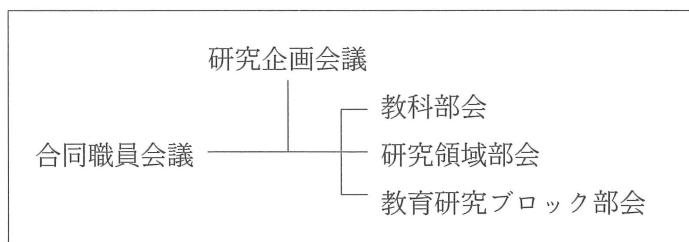
附属学校園が取り組む研究の方向づけについて相談する機関である。研究を統括する附属学校主事と各学校園の研究部長・副部長で構成されている。研究の推進状況をみながら、随時開催しているが、月2回程度の開催となっている。

## ②教科部会

国語，社会，算数・数学，理科，外国語活動・英語，音楽，図工・美術・技術，家庭科，保健体育の9つで編成し，全教員がわかれて所属する。幼稚園の保育については，5つある各領域の内，重点領域を決め，教科とのつながりを探る。今年度は，健康領域からせまり，保健体育とのつながりを考察する。中学校の技術科については，今年度は，ものづくりという観点から図工・美術との連携を図っていくこととする。

## ③研究領域部会

「保育・生活科・総合的な学習の時間」，「道徳」，「特別活動」の3つで編成する。これら3つは，教育活動全体で取り組むべきものであることから，本来はそれぞれの部会に全教員が所属することが望ましいが，運営上難しいのでわかれて所属する。



## ④教育研究ブロック部会

本学校園は，これまでの幼稚園，小学校，中学校という枠組みを残しながら，それぞれのなめらかな接続が実現できるよう，あるいは，11年間の子どもの育ちがうまくつながるように，11年間で3つの期にわけて子どもの育ちを見つめていこうとしている。それを，本学校園では教育研究ブロックと名づけ，初等部前期，初等部後期，中等部の3つに分けている。これは，本学校園独自のものであり，附属学校園の全教員が，いずれかのブロックに所属している。

- ・初等部前期ブロック・幼稚園4歳児から小学校2年生までの4カ年
- ・初等部後期ブロック・小学校3年生から小学校5年生までの3カ年
- ・中 等 部ブロック・小学校6年生から中学校3年生までの4カ年

研究に関しては，研究企画会議で原案をつくり，経営会議や各委員会，各学校園の職員会議等で検討することにより，全体の方向付けをしている。これまで各学校園が大切にしてきたことがあり，それらをうまく融合させていくことは難しいが，協議を重ねていくことで少しずつ統一感のある取り組みがうまれている。今までに，教科学習中心の取り組み，研究領域中心の取り組み，学校運営全体に関わる取り組みなど様々な取り組みをし，一貫教育としての研究を推進していく上で，何を対象にしていけばよいのかについても揺れながら進んできたが，今年度は，保育・教科学習を中心にした取り組みと，研究領域を中心にした取り組みの2つを位置づけている。

## (3) 今年度の成果とこれからの課題

今年度は，保育・教科学習を通した確かな学力の育成と，研究領域の学習内容を教育研究ブロックから検討することを通して社会力の育成に取り組んできた。その取り組みを通して見えてきたことをまとめてみたい。

保育・教科学習の取り組みでは，子どものかかわり合いのある学びを通して，思考力・判断力・表現力の育成をめざしてきた。各教科の特質を生かしながら，めざしていきたい思考力・判断力・表現力とはどのようなものを整理することができたこと，そして，その整理をもとにして授業実践が進められていることは成果のひとつである。これからも修正を加えながら歩んでいくことは当然であるが，基本的な整理ができたことは，実践を検証する上での尺度となる意味でも成果と言える。ただ，実践を繰り返した上での検証が十分ではない部分もあり，これからの実践の積み上げに基づく整理を進めていくことが今後の課題である。

研究領域の学習内容を教育研究ブロックから検討した取り組みについては，指導上大切にしたいこと

が見えてきたことが大きな成果である。「保育・生活・総合」「道徳」「特別活動」は、どれをとっても扱う内容が豊富であり、検討していることがぶれてくると何をしているかわからなくなるが、今年度は発達段階に応じて育てたい力、子どもたちが出会う「ひと・もの・こと」、重点指導目標といった観点からおおまかな整理をすることができた。ただ、現時点では、この検討は研究領域や教育研究ブロックの主任による、おおまかな検討になっており、本学校園の全教員による検討にまで深めることができなかったことは、今後に残された課題である。その意味では、今年度は、社会力の育成をめざす上でたたき台ができあがったと受け止めたい。今後は、実践に根ざした検討を加え、さらに深めていきたい。

今年度の取り組みを内容面からふりかえると、上記のような成果や課題があげられるが、最後に研究を施設隣接型の本学校園で推進するという立場からふりかえておきたい。

本学校園は、基本的に職員室が各学校園ごとにあり、全教員が同じ時間を共有する時間が常時あるわけではない。したがって、協議ひとつをとっても、各学校園の動きをとってから調整して行うことになる。研究で扱っている内容や方法が多岐にわたることもあって、基調提案、研究総論、各教科や研究領域の構想、実践を積み重ねるための動き等について深めていくための時間を生み出すこと、そして、それをどの組織で動かしていくことが適切なのかについて明確にしておかないとスムーズな取り組みが進んでいかない。そこには、推進していくための工夫が必要であり、うまくマネジメントすることが必要である。本学校園は、その工夫を積み上げて現在に至っているが、さらなる工夫とよりよいマネジメントが必要であると考えている。

(文責 陶山 昇)

- 〈参考・引用文献〉
- ・「データが語る子どもの実態」(河村茂雄, 図書文化社, 2007年7月)
  - ・「教育再生への挑戦」(PHP研究所編, 2007年12月)
  - ・「中央教育審議会答申」(文部科学省, 2008年1月)
  - ・「教育研究」(財団法人初等教育研究会編, 不昧堂出版, 2008年8月)
  - ・「社会力がよくわかる本」(門脇厚司, 学事出版, 2005年11月)